

陽性者追跡システム・院内・病院間連携システムの構築に関する研究

研究分担者 池田 房雄 岡山大学病院消化器内科助教

研究要旨：肝炎ウイルス検査結果陽性時に電子カルテ上で検査陽性を表示するシステムの利用においてより多くの検査陽性者に肝臓専門医を受診してもらう工夫として、検査結果報告書、肝臓専門医への紹介状、返信用書類や封筒を検査陽性者に郵送した。また、受診が確認できない人には書類を再送した。これら郵送書類を見て肝精査の必要性を認識し肝臓専門医を受診した患者が有意に増加した。肝炎ウイルス検査受検者への報告を徹底することは肝臓専門医を受診する動機付けとして有用である。

共同研究者：下村泰之・岡山大学病院
消化器内科

A．研究目的

感染症スクリーニング検査の受検者への結果報告を徹底し、その後の二次精査受診や適切な治療につながるようにするシステムを構築・拡充する。

B．研究方法

肝炎ウイルス検査陽性者の電子カルテ上に肝臓精査を勧める自動表示システムを導入、検査施行医が直接説明するか受検者へ報告書を郵送し、検査報告を徹底した。更に平成26年度より肝臓専門医受診用紹介状、返信用書類や封筒も添付郵送した。また、郵送半年後に二次精査結果不明の場合は書類を再送した。これらの工夫で肝臓専門医受診率が向上するか検証した。

(倫理面への配慮)

岡山大学研究倫理審査委員会承認

C．研究結果

当院で平成25年4月より平成26年3月末までの1年間と平成26年4月より平成27年3月末までの1年間で非肝臓専門診療科での肝炎ウイルス検査陽性者への検査報告率は9割（2013年は949例、89%、2014年も857例、89%）で、郵送による報告が7割（72%および74%）であった。2013年は肝臓専門医受診を確認できたのが検査陽性者の5割（49%）のみだった。肝臓専門医への紹介状同封で105例（11%）が地元の肝臓専門医を受診したと紹介状返信があり、半年後に検査報告書を再送して78例

（8%）が肝臓専門医を受診し、その半数は再送書類を持って当科を受診していたことから、検査報告書の再送が肝臓専門医受診率の向上にも寄与すると考えられた。これらの試みにより2014年は72%で肝臓専門医受診状況を確認できた（ $p < 0.001$ 、 χ^2 乗検定）。初めて肝精査を受けたと判明した比率も33%から49%に向上した（ $p < 0.001$ ）。2013年4月から2年間の精査結果集計では、219例が初めてHCV抗体陽性を指摘され、107例が慢性肝炎、5例が肝硬変と判明し、55例が抗ウイルス治療を受けた。また、125例が初めてHBs抗原陽性を指摘された。その9割（114例）は肝機能正常のキャリア例だったが、6例慢性肝炎、3例肝硬変と判明し、核酸アナログ製剤導入となっている。HBs抗体陽性例のうち654例（46%）より回答があり335例（51%）は当科で肝精査を行った。HBs抗体陽性者の多くがB型肝炎の既往感染だったが、化学療法や免疫調整剤使用中でHBV DNA陽性化例14例を含んでおり、核酸アナログ製剤が導入された。また、フィブロスキャン®を受けた198例のうち14例は肝硬度7kPa以上であり、B型肝炎など肝疾患家族を有する症例が3例含まれていた。

D．考察

電子カルテ上での肝炎ウイルス検査の結果報告に関するシステムを導入することは肝炎ウイルス検査陽性者の見逃し防止に有用である。また、検査報告書や肝臓専門医への紹介状を検査陽性者に郵送し、郵送半年後に肝臓専門医受診を確認できなかった

症例に書類を再送することで、肝臓専門医受診状況が確認できるだけでなく、肝臓専門医受診率向上にも役に立つと思われる。

E．結論

肝炎ウイルス検査陽性者の電子カルテ上に肝臓精査を勧める自動表示システムを導入し、受検者への検査報告を徹底することで肝臓専門医受診率が向上する可能性がある。

F．健康危険情報

特記事項なし

G．研究発表

1. 論文発表

下村泰之、池田房雄ほか「肝炎ウイルススクリーニング検査陽性患者に対する検査報告システムの構築による肝臓専門医受診率向上への取り組み」
肝臓56号 p137-143,2015年

2. 学会発表

下村泰之、池田房雄ほか「当院におけるHBs抗体陽性患者に対する肝硬度測定」第20回日本肝臓学会大会

H．知的財産権の出願・登録

1. 特許取得なし

2. 実用新案登録なし